

269

512

(牧野會頭題字)



幸  
旅  
多  
矣

於  
修  
樂  
部  
樓  
上

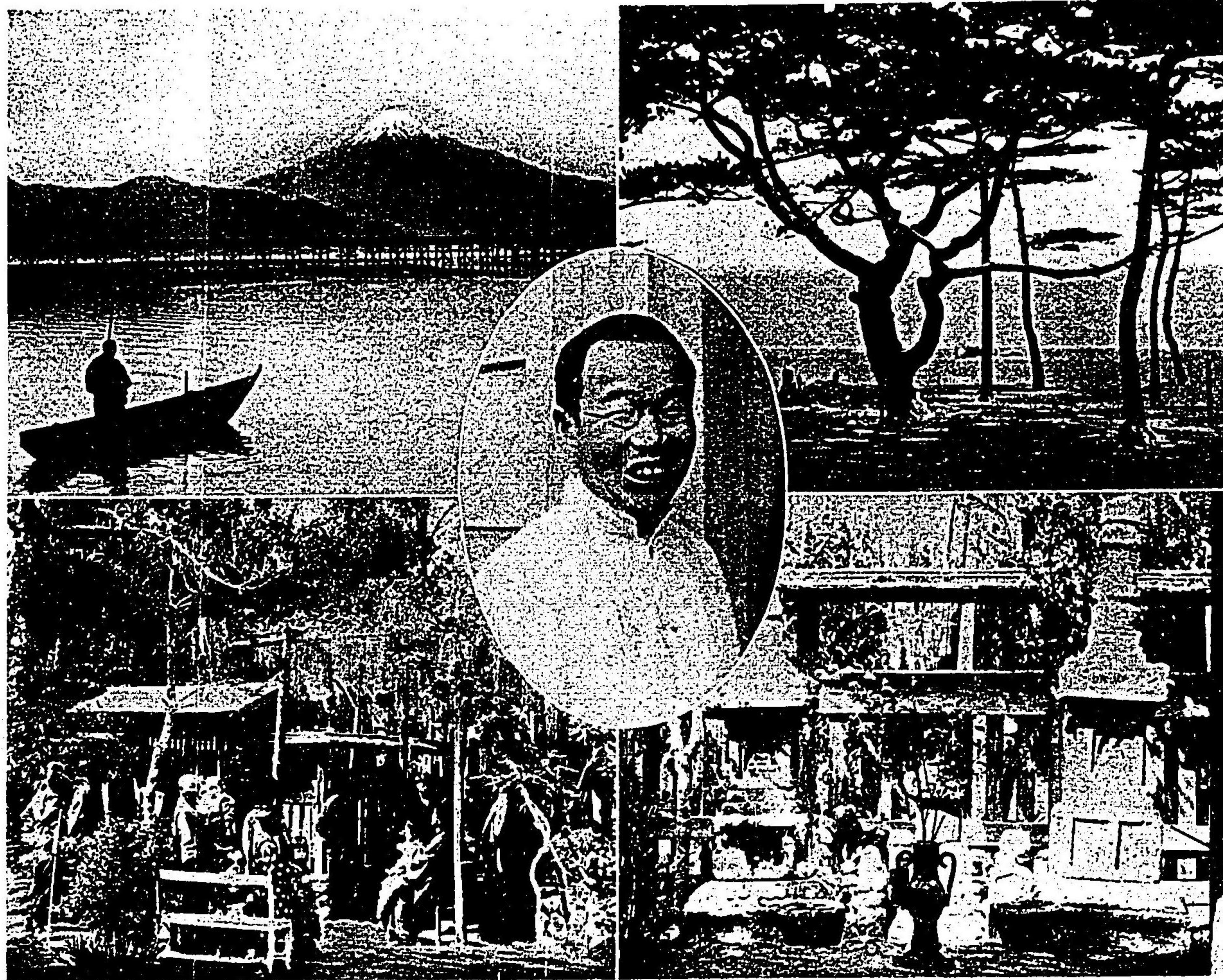
牧  
野  
會  
頭



ニ コ ク 俱 樂 部
牧 野 會 頭 自 己 暗 示
一 ニ コ ク す れ ば 身 體 健 康
二 ニ コ ク す れ ば 家 庭 圓 滿
三 ニ コ ク す れ ば 商 賣 繁 昌

(る見を士富りよ松衣羽保三)

景風の松衣羽保三



(中央のニコくは著者福良竹亭君)

(二の蹟舊前御野熊)

(一の蹟舊の前御野熊田池州遠)

## ニコく旅行の序

世にニコく宗といふもの行はるその宗旨之淵源遠く神代に發し大穴牟遲の神これが傳道師たり降つて明治の世に追んで牧野ニコくと云ふ人あり職を銀行に奉じて頭取たりニコく宗の妙諦に達して遍く天下に同志を募るその機關雜誌ニコく忽にして三萬部の發行を數ふ余久良岐の如きも亦その信者の一人なりしかして余の友東京日々新聞記者福良竹亭君亦ニコく信者の一人なるのみならずその容貌形狀實にニコく黨の選手といふべし君と余と曾つて報知社に在りて常にニコくの行樂を試む

序

(1)



余の病んで久しく籠居するや君常にニコくの容貌を以つて余を見舞ふこと今に十數年今年君その社の活動屋となつてニコく旅行を劇職の間に試む君性研究を好み一事一物について必ずニコくの理屈を附す遂に積んで一卷と成る今これを上梓するに方り一言余の序を求む余ニコくとして之の要求に應じたるも餘りニコくとして遂に序文の立案を忘れたり、ア、面白い哉、ニコく宗！ア、面白い哉、ニコく旅行、ア、面白い哉、僕の序文！！

明治四十五年五月三日

川柳久良岐ニコくとして題す

序

福真竹亭君は阿波徳島の人にして予と郷を同するのみならず因縁又頗る深し、君短軀重顔、行蔵俱に生れた儘の天眞を失はず、一見すれば大に親しむべくして而も餘り偉らからざるが如き、一度新聞記者として椅子に倚る時は其手腕の大、精力の旺盛、如何に君に匹敵し得べき人は蓋し甚だ稀なるべし。君はまた其精力と手腕の卓絶せる外に甚だニコく的天分に富む人も、一度君に接する時は何人と雖も先づ君が温乎たる心情に感服せられずんばあらず。予君が崇高の性格を欽仰し茲に十有餘年の交友を續け來れるものなるが君は實に多涙多感、頗る友情に厚く加之も平常ニコくとして樂天主義を鼓吹す、君放すれば必ずその旅中の珍談、失策を報じ越されれば先づ予が茅屋を訪はれて、快談時に夜を徹することあり、私に思ふに君が新聞記者としての成功の素因は其異色ある相貌と卓越せる手腕と至誠、温情、廉潔によりて味つけたるに因らざるにあらざる乎予は今、次日頃敬愛する君の著書を我が俱樂部より發兌し得たるを喜ぶと共にこれに依りて天下幾萬の士がニコく的好讀書を得たるを慶賀せんばあらざる也。

於ニコく俱樂部樓上

明治壬子夏日

松永敏太郎識

序

顔の拜める女は薄情で、心情がやさしいと愛書のつくのは大抵お福面だ。世の中には  
どういふものか趣味と實用——見て美しく嗅つて甘く——用なき時は床間へ据ゑて眺め  
朝晩は勝手の用を足すといふ様なものは滅多にない。然るに此「ニコく」旅行は丹念家で  
文章家の福良君の筆に成つただけあつて趣味と滋味とを兼ね備へて居るから特に江湖に  
薦めたい。ハンモックの中でもよし、座敷の真中でもない、悠乎讀んで見玉へ。白雲に伴は  
れて三保の松原に遊ぶ事も出来やうし、現代の文明を解釋する方法も解るであらう。美に  
して貞淑なる妻の如く重寶な本だ。之を嘘と思ふ人にも思はざる人にも銷夏避寒の好  
讀物たる事は僕が保證致します。

ニコく俱樂部樓上にて

神長倉眞民

壬子七月

序

我ニコく俱樂部の編輯室へは様々の人が来る。代議士も来る、實業家も来る。文士も  
家も来る。林田鞠長さんの様な、心が凝つて表の碎けた人も来れば、髯と洋服丈の  
堂々たる看板倒しも来る。我編輯室の一局は、廣い社會の縮圖である。此福良竹亭  
先生も其の良く来る人の一人である。一寸見た所では、衆々然として喪家の狗の如しと  
いはれた孔子さんと思ひ出す様な人であるが此ニコく旅行を見るまでは更に竹亭先生  
をこれ程趣味の人であらうとは思ひ到らざる處であつた。文は人なりで竹亭先生の此の  
短かい紀行文を讀む事に依つて、山河幾百里を隔てた諸君も其高潔清麗にして洒脱飄逸  
なる我福良竹亭先生のニコくの風采を眼のあたりに見出しめ得るであらう。

於ニコく俱樂部

桑門信兮

明治四十五年七月中完

ニヨク旅行の御序に暑中御見舞申上ります



(神長倉生) (竹亭人) (松永敏太郎) (桑門侍)

はしがき

余は三十六年の春東京を去りて、九年振りに再び東都の客となる。昨年  
 の夏は匆忙を極め、知己への暑中見舞なども其儘に打過ぎたるが、本年  
 の夏は何か奇抜なる贈物もがなと考へたる末、今春社命に依り通俗講演  
 活動寫真會の講演などとして、東海道を旅行せし折の紀行を集め知己に  
 頒ち、一つは余の消息を知らしめ、一つは涼搦の友となさんと、松永君  
 に相談せしに、君破顔一笑して「百部を刷るも手數なり、千部を刷るも  
 手數なり、手數は一つなり、寧ろ全國三萬のニヨク同志に頒つてはと  
 うです」と云はれて見れば成程さうかと、萬事を松永君に託し出來上つ  
 たのは此書なり。敢て特色として御披露する程の事もなし。其中に於て

「天下に新しきものなし、其見方によつて新らしくなる」といふ余の議論の片々を認め給はゞ幸ひなり。此書成つて歸つて細君に語り「本年は暑中見舞は、お前に心配を掛けないよ、俺の手で行つて仕舞ふから」と云へば細君「では妾も肩が軽くなりました」と大にニコく、ア、有難いかな。

七月の初旬梅雨晴の爽快なる朝

竹亭主人

(2)

『ニコく旅行』目次

新橋より三島迄	(一)
三島名物	(五)
嗅天下の歴史	(九)
芹と水	(一三)
三島神社	(一五)
陰陽道の流行	(二〇)
恵比須様と草鞋	(二三)
三島女郎	(二六)
雲助と馬子	(三一)

(1)

目次



三島曆の來歴	(三三)
三島より吉原迄	(三八)
寺の門に梅	(四四)
富士、アイヌ、陽石	(四六)
大宮の半日	(五一)
幽霊の足跡、閻魔の首級	(五七)
静岡の名物	(六三)
お城の側面觀察	(六四)
名譽ある監獄	(六七)
長閑な三保の松原	(六八)

( 2 )

羽衣傳説の分布	(七〇)
羽衣の松	(七三)
三保のお料理	(七五)
船中で龍の講釋	(七七)
掛川城の舊蹟	(八〇)
歌人と科學	(八二)
戦勝觀音	(八五)
噴霧の井戸	(八九)
静かなる掛川町	(九〇)
旭山の黄金探檢	(九二)



等で辛抱せねばならぬ羽目となり平沼へ着いてやつと三等車に乗換られた。平沼から乗込だ一行は花嫁のお里歸と見えて白粉を塗立て高鬘に結つた丸顔のお嫁さんに羽織袴、小紋縮緬などの男女四五名、外は春めいて梅もかをり初める頃とて一段陽氣に見受けられた。附添ひの男は女はお祝酒にした、か酔つて居る上に、スチームの暖氣に當られ顔は赤く上氣をして居つた。互に面白さうに雑談をして居るのを花嫁は流石に人に顔を見られるのを厭うてか差しうつむいて黙つて居つた。僕は近頃花嫁といふものを見ると何んだか悲哀の感に耐へない、自由なる

(2)

娘の天地を捨て、夫婦といふ桎梏の下に繋がれてその半生を終るかと思ふと氣の毒に耐へない、と思つて花嫁の顔を見ると何か考へ込んで居るやうである。彼の女は將して何を考へて居るのであらう、生れて以來始めて経験した彼の夜の怖さ恥かしさを想つて居るのであらうか、或は待ち楽しんだ婚禮といふものが案外無意味のツマラヌものであつたのを後悔して居るのであらうか、想像はそれからそれへと湧いて来る。大船へ着くと付添ひの伯父さん車窓を開いてサンドウキツチを求め「花嫁さん、サンドウキツチは如何」と辨當の折を花嫁の眼の前に突き

(8)

付けたので今迄沈黙して居た花嫁もホ、と笑つた。それと同時に僕の想像も破れて仕舞つた、花嫁にサンドウキツチ飴ン坊先生の題材となるべきものだ。花嫁の一行は藤澤で下車した。午後の四時頃に御馴染の「富士の白雪朝日に融ける、融けて流れて流れて融けて三島女郎衆の化粧の水」と謠はれた三島の宿に着いた。定めし色の白い女が多からうと思つて居ると豈計らんや路行く女は割合に色が黒いので歌に相應ない。これも不思議の一つと宿の女中に聞くと笑つて答へない「ア、さうだ、これは三島の女は素地は白いのだが富士の雪やけで黒くなつて居るの

(4)

だらう、ねえ姉さん、さうだらう」と云ふと女中は我意中を忖度したとばかり嬉しそうな笑を漏らした。

### ▲三島名物

此日(二月六日)東京を出發する頃から曇つて居つたが、三島へ着くと怪しい雲が富士の中腹に徂徠して箱根の山も白い雲に鎖されボツくと降り出した、五時頃からいよく本降りとなり名物の風さへ加はり之では折角の活動寫真もダイなしかと案じて居ると、北豆新聞店の伊澤君が見え「大丈夫ですよ、活動寫真の評判はたいしたもの

(5)

ですから雨が降つても槍が降つてもお客はドシ／＼来ますよ」となかくの大元氣、果せる哉定刻には會場の劇場は満員を告げ非常の盛況を呈した。伊澤君鼻を蠢かして「どうです先生、僕の言つた通りでせう」「成程、これも全く君の盡力で僕も感謝するよ、」活動寫眞は午後十時半頃に終り會場を出ると雨は全く霽れて青空には星が銀砂子を散らしたやう、富士はと見ると雲は全く散じ皓々たる高峰の雪は夜の空に一段と白く輝いて氣高く仰がれた。翌朝夙起して三島の町を散歩したが、そのむかし馬に鈴をつけてハイドオ／＼と通つた宿驛の面影が残つて居る。

(6)

アノ箱根の山を見ると追分の馬子唄を想ひ出さずには居られない。箱根の山は諸方から眺めらるゝけれども追分の馬子唄を最も適切に聯想されて望遠鏡で見るとアノ峠の道を暢氣な馬子がお客を乗せて「箱根八里」を唱つて通つて居りはすまいかと思はれるほど人を引き付けるのは僕は三島に於て初めて經驗した。案内の伊澤君、彼の南の山は天城山、正面は修善寺、頼朝公が三島明神へ千夜參詣せられし道はアレですと一々指點して説明する三島の名物はと聞いて見ると「左様、嗅ア天下に芹に水でせう」と伊澤君答ふ。これあるかな、嗅ア天下。そもその開祖

(7)

は誰あらう、征夷大將軍、六十六ヶ國總追捕使右大將源の大頭將軍の御臺所、伊豆は北條の住人、時政の娘、二位の尼政子夫人である、先の内閣總理大臣大頭將軍桂の太郎公も御臺所かな子夫人には一目を置いてゐるとの事であるが鎌倉の政子夫人と來ては頼朝公も全く頭が上らぬ、嗅ア天下の模範を示したのだ伊豆の女は此の政子夫人をお手本として女權を揮つて居るのであらう、三島に嗅ア天下の遺風の残つて居るのは面白い。ア、嗅ア天下なるかな。三島明神の境内に頼朝腰掛石といふのがある、頼朝が三島明神へ千日通うた時休憩した石だといふ古い三島

石で椅子の形をして居る、さうしてそれが又米國の福の神で運の神であるビリケンビリケンの腰掛こしかけに似て居る、頼朝公とビリケン、その間因縁いんねんのない事はない、頼朝公はビリケン式の幸運かうんの兒だ、況や公の祈願きぐわんを凝こめたる三島しまの大明神だいみやうじんは福の神かみの問屋とんや、ニコくの本尊ほんぞん、惠比須えびすさまに於てをやた。

### ▲嗅天下の歴史

三島しまの名物めいぶつ、嗅ア天下てんかは大に僕の氣きに入つた。日本にっぽんは男尊女卑おんぞんめいひの國くにであると稱しやうせられて居るけれどもその實女子じつぢよしの潜勢力せんせいりきよくは男子だんしを動かして居るので一門一家いっもんいっけは申す迄も

なく日本の政治は藤原氏より徳川氏に至る迄婦人の勢力に依つて支配されて居たのだ。閨閥といふものは明治時代の才人が創めたものでない、むかしは現今よりも一層猛烈でさうして露骨で自己の勢力を得るために多年連れ添うた妻女を去り權勢家と縁を組み立身出世を圖つたものだ。近頃三浦文學博士が藝文で發表した「鎌倉時代の女流政治家」を見ると當時朝廷に奉仕した公卿などの結婚は全く閨閥主義で御都合次第で幾度も妻女を取換て居る。さうしてその度毎に新妻のお蔭で位階が陞進するのである。去られた妻女は困るだらうと思ふが直ぐ尼寺へ這入

つて念佛三昧に日を送り離縁を非常に苦痛として居ないのみならず一旦去つた妻女でもその姻戚が勢力を挽回すると再び逢戻して覆水盆に復するといふ奇觀を見るのである。後鳥羽院の寵遇を受けた郷の局は宮廷に羽振を利かして居つたが四十五歳で夫を持つことになつたが色香の失せた姥櫻でも後鳥羽院の御寵遇を受けたといふので縁談の申込は非常に多かつたが、局は權大納言光頼の長子宗頼といふ男と握手して宗頼は頼子といふ夫人を離別して五歳も年上の局の婿となりそのお蔭で正二位權大納言に迄昇進した。その宗頼は死んだので公卿達は第二の

宗頼にならんと運動をさく／＼怠りなくその内前太政大臣  
藤原頼實といふ男、三十餘年も連れ添うた夫人に三行半  
を與へて局の夫となつた。當時官爵の任叙は勢力ある局  
上臈の取なしに依つたので勢力ある婦人を妻女とするこ  
とが抑出世の第一であつたので、この意味から云ふと鎌  
倉時代は嬖天下の時代であつたのだ、獨り公卿ばかりで  
なく武家も同様であつたと思ふ。これを思ふと明治の閥  
閥才人などは罪の軽い方だ。

( 12 )

### ▲ 芹 と 水

次に三島の名物は芹と水だ、芹といふ植物は古來詩人の  
吟詠に上り詩經の中にも芹を題材としその情を敘したも  
のがあつた、分て水溫む小川のほとりなどに青々と萌出て  
居る所などは全く詩的である。僕は野邊の芹を見ると少  
年時代にじめく／＼と濕つた田舎の水田の畦で近所の小娘  
達と一所に摘んで樂んだ事が眼の前に彷彿として現はれ  
る。さうして春も既に酣に桃の花の咲く頃にこの清き水  
花が伸びて香り高くさうして一面に白い小さな花を着け  
る、夫を摘んで小娘の前髪に挿して遣り「お姫様のびらく  
簪だ」と戯れたのも過去の夢ア、懐しきは少年のむかし

( 13 )



なりけり。扱て又三島の水は滾々として町内の溝渠を流  
れ末は附近の田を潤して居る、その水源は小松宮御別邸  
附近にある方五坪ばかりの池で水は泉の如くに水底より  
湧き池に満ち晝夜を捨てず滾々として流れ出て居るので  
ある。その清冽なるは水底の細鱗をも數へられるほどで  
盛夏の頃でも十分と足をひたして居られないさうだ。如  
何にも富士の白雪の融けて流れるのはこの水だらうと合  
點せらる、ア、彼の美しき芹はこの渚に生えるのである、  
三島名物として賞味せられるのも無理はない。宿へ歸る  
と食膳に芹のいたしが載せられてあつた、箸を下すと軟

かでさうして甘美く、香ひが何とも云へぬほど佳い、三島  
でいろいろ料理を喰つたがこの芹の味は忘れられない。

### ▲三島神社

三島町に遊んで三島神社に参詣せぬのは人の家を訪うて  
主人に逢はずに歸るやうなものだ。三島神社は町の中央  
にあつて日の護夜の守に氏子を護り家内安全商賣繁昌目  
出度かりける次第であるが、祭神は皆様お馴染の日本ビ  
ールのレツテル、ニコくの惠比須さま、境内へ足を踏み  
入れると早やモウ福の神に抱れるやうで嬉しい心持のす

るのも神徳の炳焉なる故であらう。惠比須様御本名を事代主命と申す、釣魚が至つてお好きで八雲立つ出雲の國は美保關で釣をしてムつたが伊豆は魚が多いといふので三宅島へ渡られ島傳ひに白濱に移らせ給ひ其後伊豆の國府なる今の三島の地に遷し參らせたので左ればこそ今に社前の神池に鯉などを放つてあるのちやと神主は語る。これは少々附會である、惠比須様の神池として人間の穿つたこんな小さな池では御満足はあるまい、日本一の富士の山の背景に立つてゐる惠比須様、その御池は茫々たる太平洋でなければならぬ、其處には鯨も潮を噴いて居

る、大鯛も悠々と泳いで居る、僕は惠比須様の神池として太平洋を捧げたい、人間の小ぼけな了簡で神慮を計るなどとは鳥訶の沙汰だ、神様の事は先づ神様の了簡になつて考へねばならぬ、日本の神様は死んだ神様ぢやない、神代のむかしより今に至る迄太陽の東より出で、西に没するやうに神様は蒼生を守護すべく努力されて居るのだ、アンカラカンと手を拱して氏子の齋祀を受けるやうな左る因循姑息な神様ではない、西洋の學者で「宇宙は造化の時々刻々の創作なり」と云つた者があるが、其處に造化の力が見えて我々は活ける生命ある神を認められるのだ。

惠比須様は日本の活ける神だ、活々として働くものがお好きだ、三島の男女はこの惠比須様を中心として精々と働いて居る、さうして活気が町内に満ちて居る、偕もこの三島神社も徳川時代には神職と僧侶とがチャンポンに奉仕して三層の塔や護摩堂なども建つて居つたが明治初年神佛分離の際佛敎臭いものは悉く破壊して純然たる神社となつたが其際別當を勤めた愛染院の住職は還俗して神主に早替をしたといふ滑稽もあつたさうだ。尙ほ僕が感興を惹いたのは三島神社と陰陽道の關係で僕は日本の神道には陰陽道が混交して居ると睨んで居るのであるが

三島神社又僕の説を確かめ得べき好材料を發見したので。三島神社の祭神は事代主命であるが此命が伊豆の大島にあつた時占卜法を教へられたと云ふ事が傳へられて居る其法は即龜卜である。兩みつと名づくる龜の甲を取り櫻の木に皮に火を付けて焼き其裂けた形を見て吉凶を卜するので、こは日本の神代から傳はつて居り龜の甲を焼くのを龜卜、鹿の骨を焼くのを鹿卜と云ふことが陰陽道の書物に載つて居る、さうして日本には伊豆の外壹岐、對馬等の海島に此法が傳はつて居つたので朝廷で卜部を選ぶ時には常に此等の地方から卜術の優長者を採用するのが

例になつて居つたのである。

### ▲陰陽道の流行

二千年來日本の上下人心を支配して來たのは佛敎でも神道でもなく又儒敎でもなく、支那より渡來した陰陽道である。陰陽道は儒敎よりも佛敎よりも一層深く社會の人心を支配して居たので上は朝廷の政治向より下は庶民日常の行爲まで皆陰陽道に依つて支配されて居つたのだ今も猶ほ傳はる幹支術とか陶宮術とか、星練、合性、家相、方位など稱するものは皆陰陽道から出たもので俗間にな

かく勢力を占て居る。僕を以て云はしむると生存競争が激烈になると人々の煩悶が加はり遂に運命を信仰するものが多くなるので陰陽道の如き非科學的のものは表面馬鹿々々しいと排斥しながら裏面に於て盛んに行はれるのである。僕は斯く考へつゝ三島神社の境内の茶屋で澁茶を啜つてフト傍の東京の新聞を見ると、眼の寄る所へ玉とやら、陰陽道に關する書物の大々的廣告が麗々しく掲げられてあつた、曰く『實驗調法神術靈妙秘藏書』曰く『立身興家九星と陶宮術』前者は第九版、後者は第四版を重ねて居る、こんな書物の賣れ行くのを見ても僕の説の

誤つて居ないことが分る。さうして現代の人心の機微をトする事が出来る。机の上で神、耶、佛の三教合同などを企て、ムる内務省のお役人などはチト此邊に氣を付け給へ、神域を出て眼に付いたのは元治元年京、大阪の飛脚問屋より寄進した石燈籠である、當時の飛脚問屋は今の郵便局の前身、近來世界の通信事務は非常に進歩し西洋では飛行機で郵便物を運搬して居る所もあるといふ、それに就けても古人の付けた「飛脚」といふ文字は頗る面白いと獨り興を催す折柄、これも參詣客と見え料理屋の女將らしき肥満した年増とお客と思ほしい紳士風の男石

段を降りつゝ「神様も妾達が參つて遣らぬと困るだらう」と語りながら過ぎ去つた。僕はこの言葉を聞いて悚然とした、さうして此處にも又時代の思潮の現はれて居るのを看取した女將の言葉は總てを自己本位より割出さんとする時代精神の現はれたものだ彼等は信者があつての神様と見て居るので恰も觀客對俳優の如くに考へて居るのだ「妾達が總見をして遣らぬと俳優が困る」といふと同一の考へを持つて神様に對して居るのだ。

### ▲惠比須様と草鞋

僕は其足で三島の古刹法華寺を訪うた法華寺は天武天皇  
白鳳二年知鳳法師の創立で初めは法相宗であつたが後眞  
言宗に改め七八百年を経、慶長七年曹洞宗となつたが今  
は廢類して只一小庵が存するのみ寺は坊さんに來歴を聞  
いても分らない庵の庭に苔の蒸した石佛が數軀ツクネン  
と列んで居る。何も火山岩を刻んだものだ坊さんに聞  
て見ると千年以上を経て居るといふ、裏へ廻つて苔を剝  
がして見ると、古い所で寶曆安永即ち徳川中世時代に建  
立せられたのだ。現場で素破抜くのも氣の毒と思つて「如  
何にも古い碑ですな」と感心したやうな面付をして坊さ

んに向ひ「この御寺に惠比須様の御神體があるさうです  
が眞個ですか」「ハイ當寺の惠比須様は即ち三島神社の御  
本體であります」「ソレは又どういふ關係で」「ハイ、夫は  
當寺は惠比須様が當地へお着きになつた時一番に草鞋を  
脱がれた所なので……惠比須様に草鞋は面白い、惠比須  
様は天照太神の御子で蛭子と云つて足が萎て居られたの  
で盥に乗せて流したといふ神話もあるにさりとて面白い  
坊さんの説明、これでは達摩さんが天竺から穿いてムツ  
た下駄もありさうな者、ソモサン如何にと問答でもオツ  
初めたくなつた。

### ▲三島女郎

「君は熱心に三島の名物を紹介して居るが今一つ落ちて居るものがあるぜ」と某君の注意、オットよし心得たソレハ三島名物女郎だらう、が女郎といふと偽善家は直ぐ肩を聳やかして國辱でももあるが如くに怒號するので困る尤も僕とても三島女郎を廣告的に紹介しようといふ考へは持たない、今日世の中に女郎といふと風俗壞亂の問屋であるが如くに云はれて居るけれども總て社會上に存する事物は必要に依りて起つた者で必要が去ると共に滅

亡して仕舞ふのは進化の法則である。三島女郎なるものが存在して居るのはその存在の理由がなくてはならぬ、六ヶ敷い理窟は後廻しとして諸君先づ俗諺に現はれたる三島女郎なるものを想像して見給へ、富士の峰を背景として遊女屋の周圍には雪解の水が潺湲として繞つて居る良夜には月が來て之を弄り銀の玉を粹いて流れる、二階の欄干に友禪か何んかの派手な振袖をもたせて投鳥田に緋鹿子の切をかけ襟元の飽く迄白く生際の初毛の柔かなる女、樓の下行く水を眺め時々眼を擧げて箱根の山を見るのは君や今アノ道を越すらんと心の思ひを寄せるので

あらう、僕の想像に浮んだ俗謡の中から抜け出で、來た三島女郎は斯様なものであるが、今日三島町に足を踏入れると共にその詩興は悉く破れて仕舞ふた、矢張歌で想像して居る方がよいのだ。これから一寸と理窟に這入る。全體東海道は云ふに及ばず各地の宿場女郎といふものは天下の往還に紅陣翠帳を張つて旅客の懷中をしぼり取らうといふのみの計畫で起つたものでない、先づ其の昔箱根八里を越すのは今日太平樂を列べ汽車で通過するやうな暢氣なものではない、随分足も疲れるであらう氣分も弱るだらう、其疲れた足弱つた氣分を引立て、く八里の

嶮路を越ゆるのを坦々たる往來の如くに感ぜしむるのは只馬子唄の力ばかりではない、下りの客は三島、上りの客は小田原等の宿場があつて其處に旅客を慰むべき或る種の女性が住んで居たからだ。であるから當時にあつては宿場女郎は一種の交通政策として必要であつたのだ。旅客をして最も愉快に安全に往來せしむるのが交通政策の第一義で現に鐵道院などで冬はスチム、夏は煽風器、宿屋の世話まで引受け尙ほ旅客に不快の感を起さしめぬやうと直接旅客に接する車掌給仕等は眉目清秀の美男子を選んで乗込しめて居るではないか。今に鐵道院專屬の



ホテルに『旅客の御望みに依り藝妓の御取持も致すべく候』との掲示が現はれはしないかと思はれるほど旅客の待遇方に氣を配つて居るではないか。舊幕時代に宿場女郎を設けたのは交通政策何んのとさう氣の利いた主義から割り出したものではないけれども、自然とその主義に合致して居る、さうして宿場女郎は決して無益無用のものではなかつたのだ。が今日では交通も開けて東海道筋などは汽車で旅行し得られるので宿場女郎などの必要は少しも感じなくなつて來た、さうして到る處宿場女郎なるものは衰へて僅に殘喘を保つて居るばかり、それも遠

からず滅亡して仕舞ふであらう。

### ▲雲助と馬子

宿場女郎と共に想ひ出さるゝのは海道筋で羽振を利かした雲助や馬子でこれは交通の開けると共に疾くの昔時に亡んで仕舞つた。今の人は肉體を露はすのを人間の恥辱なりとし野蠻であるが如くに卑しめて居るけれども世には衣服を着けることの出來ないあはれなる人間が随分居るので、斯やうな人間は裸百貫で生活するより外に手段がないのだ、徳川政府は壓制であつたやうに云ふけれど

も人々にそれごとく職業を與へて世に無職失業の民なからしめんとした政策は明治政府の遠く及ぶ所でない、當時は社會の最下層にありて衣服をも着け得ない人間は裸百貫、雲助として生活し得られたのである、明治の政府は取締々々と八ヶ間敷く云つて人々の職業に干涉しその結果一方では失業者が續々と増加し氣の弱いものは自殺して我れから世を去り氣の強いものは社會に反抗して危険思想が全國に瀰漫するやうになつて來たのだ。正紺染のPATCH、股引がなくちや人力車が曳けないといふ窮窟千萬の世の中では失業者の増加するのも無理はない、オイ大

學出のお若衆君達は人情風俗の異つた歐羅巴の社會政策などを研究するよりは封建時代に徳川政府の行つた社會政策を調査して見てはどうだい『雲助論』や『宿場女郎論』で博士になるのも面白からうよ。

### ▲三島曆の來歴

伊豆の非山に江川先生の建設した反射爐のあることは皆人の知る所であるが三島に天文臺の建つて居たことは知る人が少いやうである。三島の天文臺は御曆師河合家の建設したもので同家の裏にあつたが、安政年間の大地震

この地震は激烈であつて三島神社の社殿は悉く倒壊したので現今の社殿は其後再建したのである。むかしは淺間神社のやうに總て朱塗りであつたが再建の際現今の如く白木造りにしたのである。』に倒壊して今は只その礎を殘すばかり、三島神社略志に曰く『太神は蓋し陰陽道の祖神とて齋き奉る所の神明と御同體にて幕政の時代は三島曆と云ふありて社中河合曆師の製本世に廣く行はれし』云々この河合曆師は今の三島町長河合龍節氏の家である河合家は奈良朝時代に奈良より三島に移り三島明神に奉仕して曆を作り鎌倉時代迄世々皇室の御用を達し當時は

關八州悉く三島曆を用ゐて居つたが其後徳川幕府に至り毎年十二月十五日御本丸、西丸、寺社奉行に三島曆を獻じそれより一般に頒布するを例として居つたが其當時相模伊豆の兩國は悉くこの三島曆を用ゐて居つた。當時日本で曆を作つて居たのは伊勢、京都、奈良、會津、三島の五箇所でも三島曆は最も重んぜられ毎年十二月京都の陰陽頭土御門家より使者を特派せしめ三島の宿にて京都の曆と三島の曆と交換して歸るのを嘉例として居つた。さうして三島の天文臺はこの曆算推歩のために建設せられたものでその使用した坤天機などは近い頃まで

残つて居つた。所で明治五年曆法を改正して太陽曆を使用することゝなつたので河合氏を初め伊勢、京都、奈良、大阪等の曆師は東京に集まり弘曆社を組織して曆を作り政府へ一萬圓の冥加金を納めその版權を得たのである。今日普通に用ゐてる略曆は河合氏等の發案で明治六年に作つたのが始まりである。其後政府で曆を神宮司廳で發行せしむることゝなつたので弘曆社では運動をして版權を神宮に移し頒布權を弘曆社に收め且つ伊勢の大麻の頒布權をも得て俄に神主の古手などを雇ひて曆と大麻とを頒布せしめたが二三年にして失敗して弘曆社は解散し日

本の曆は神宮司廳で發行頒布することになつたのだが僕は三島曆その物よりは三島神社が陰陽道に關係があるといふを知り得たのを喜ぶのである。斯くて七日の夜の活動寫眞講演會も前夜に倍する盛況で無事終了したので一行は八日の朝三島町驛より乗車して鈴川に向ふべく同停車場に赴いて少し時間があるので待合所に休んで居ると忽ち僕の眼に付いたのは驛賣のパンや雜誌の箱の中に挟んであつたソレは徳川家康公秘書、天海大僧正秘傳と銘打つた『天源陶宮術之眞理開運之秘訣』と題したもので矢張り陰陽道に關係のあるもの、偶然と云へば偶然である

けれども奇と云へば又奇だ。早速一本を求めて車中の徒然を慰めることにした。

### ▲三島より吉原迄

二月八日は日本晴で汽車で富士の裾を通過する心地は何とも云へない。車中で「開運秘訣」を取出して獨り頬笑み居るを活動班の人々が認め、それは何の本です、「これは珍妙の本で面白い事が書いてある、君達も讀で見給へ」「ジャ一つ拜見しませう」と先づ加藤君が自分の干支の所を讀んで見る、思ひ當る所があつたと見えて獨りでニコく

隣の井上君又その本を取つて見る、果ては一つの本が行の中に奪ひ合ひとなり車中に興を添へた僕が開いた所は九紫の火星で前の總理大臣桂の太郎公の星ちやさうなその判断に曰く「九紫は火星で火は形なく物に付いて燃え出して始めて形が見える、であるから單獨に事をなせば氣のみ盛んで希望を遂げる事が出来ない、が人に附いて共に事をするると忽ち氣は形を顯はして甚だしい勢で成功するか、又忽ちに衰へる」云々桂公が情意投合といふ妙な事を考へて政友會と握手したのは即ち人に附いて共に事をしようとしたので一時は成功したが、結局は行詰つ

て内閣を明渡さねばならぬ事となつた、又た曰く「九紫の性質は氣分遷り易く世話好にして外面を飾る癖あり、常に陽氣な事を好み損失多くその損失に就いて何の考へもなく只財布の輕ろさを嘆つ性である」云々、これも桂公並にその與黨の氣質に適合して居る。桂公等は戰捷後國民の感情の昂つて居る所に乘じて一等國一等國と無闇に一等國を振り廻はして外面を飾り積極政策と稱して派手な事を好み増税又増税、國力は衰耗して人民は重税に泣いて居るのを顧みずさうしてその損失に就いては何の考もなく「財政難々々々」を連呼して嘆聲を發するのみであ

る、何と能く適中して居るではないか、と云つて僕はこんな迷信的の書物を擔ぐのではない、お慰みに紹介した迄だ。

聽て汽車は鈴川に着いて一行は鐵道馬車に乗換て日本晴の富士山を仰ぎつゝ昔時の並木の街道を通つてその日の正午頃吉原町は鯛屋與右衛門方に投宿した。これは土地で古い宿屋と見えて案内せらるゝ儘に奥座敷へ通ると總てのものが舊幕時代の古色を帯びて床の間に鹿の角の刀掛さへ飾つてあつた其處で僕は先づ自分の頭を撫で、此處にチヨン鬻を頂いた體でぶつさき羽織か何んかを着て

大小をかう手挟んだつもりで此座敷へ通り大小をアノ鹿の角の刀掛に掛けて布團の上に兩膝を崩さず端然として坐つたものとして自分を考へると昔の道中の宿屋の興味が湧いて来る、さうして下女を呼んで東京日々々の記者では映りが悪いので「身共は西國某藩のもの、今度主命に依り江戸表へ罷越す粗忽のなきやう宜しく頼む」と田舎廻りの役者のやうな假色が遣ひたくなる、交通の開けると共に道中の宿屋など昔時の面影が段々滅び行く中に、此の鯛屋にむかしながらの座敷の存して居るのは地學者が朔北の砂漠中にて樓蘭の遺蹟を發見した如くに僕には多

大の興味を興へた、さうしてこの道中の氣分を發揮した、廣重の五十三次の畫などを想うて寢に就いた。夢は文化文政のむかしを辿りつゝ……翌朝起き出て鯛屋の店へ出て昨夜一寸眼に付いた一つの貼紙を見たそれには鈴子といふ名前があつたので藝者の披露目であらうと思つたが今朝能く見るとこれは此家で生れた子供の名前を貼出してあつたのだ、その式はかうである。

命名  
八白土星  
鈴子

歸納欽

乾天長地久

明治四十四年十月三十日

赤い手絡をかけた丸鬚の妻女さんが抱えて居る可愛らしい赤ん坊がそれなのだ。斯やうな風はこの土地に限り行はれて居るのか否やは知らないけれども公に生れた子供は命名を一家の中で最も人の眼の付く場所へ貼付けて置くのは好い思ひ付きで、斯くてこそ公生兒の價値が現はれるのだ。この風は全國へ及ぼしたいものだ。

▲寺の門に梅

九日の朝つとめて早く起きて富士の靈氣に觸るべく旅館を出て法華の古刹を訪うた。掃き清められた庭には箒の目新しく茅葺の庫裡から立昇る炊煙は朝の光りの中に吸ひ込まれて長閑に見えた、富士に面して立つこと少時頭も軽く氣も清々となつた、寺の門に麗かな陽光を受け梅が眞白に咲いて居る、それを桶屋の親爺が眺つゝ、精々と働いて居る、こは日本人の風懷の欽すべきところでの氣分を味はひ得るのは日常使用する手拭に迄風流な模様を染出せる日本人に限るので日本の藝術は多く其處から生れ出たのである、然るに近來は經濟上の變動に伴う



て世の中が次第に世智辛くなり夢のやうな淡い風流は段段吾々の頭から消え去り峻烈辛辣なるものこれに代り胸中に何等の餘裕といふものがなくなつた。僕は寺の門の梅を見て働いて居るこの桶屋の親爺が羨ましく思ひさうして斯やうな餘裕が現代に於て次第に滅び行くのを悲しんだ。僕は必ずしも舊物を慕ふものではないが無暗に新しいものを好むものに同意することが出来ない、天下に新しきものなし、舊物も見方に依つて新しくなるのだ。

(48)

### ▲富士、アイヌ、陽石

諸君は富士山の傳説を知り給ふや、此山は孝靈天皇の御宇に一夜に近江の琵琶湖が陥落して湧き出たものであると傳へられて居る。諸君はこの傳説を妄誕不稽とせられるであらう、がこの傳説を味うて見るとその中には少くも富士山が突然に噴起したものであるといふことが現はれて居る、今日地學者の研究に依ると富士山は太平洋中から突然噴起した所謂海中火山であつて有名な駿河灣の深海はそれがために起つたのであると云はれて居る。海中火山は今日でも太平洋中に屢噴出せらるゝが忽ち現はれて忽ち滅ぶものが多い、先年南太平洋の鳥島附近で

(47)

或る船が発見した海中火山は噴煙濛々として夜間には太陽のコロナのやうな大きな火柱が立昇つて壯觀であつたがその船が再び探検に赴いた時は既に洋中に没して影も形も見えなくなつて居たといふことである。故に富士山と琵琶湖の傳説は妄誕不稽ではなく此山が突然洋中から噴出したとの暗示を與へて居るのである。近來の地學者は地理學を研究するに當り古來の地學的傳説を研究して新しい発見をして居る、彼の支那の『山海經』の如きは一眼國とか穿胸國とか奇怪想像すべからざるものを列擧してあるので妄誕不稽の書として顧みるものがなかつたが

近來西洋の地學者がこの『山海經』を研究しこれぞ支那古代の地理書で世界に於ける貴重なる珍籍であると稱して居る、日本に於ても京都大學の小川理學博士の如き熱心なる『山海經』の研究者が出て新説を發表して居る、同博士は支那古代の地理を秩序的に記載したる禹貢よりも寧ろ一部の學者に妄誕不稽視された『山海經』が支那古代の地理及び歴史を知る上に於て決して輕視することが出来ぬというて居る又『字音』の研究に熱心な松村理學博士の如きも大にこの『山海經』を推奨されて居る。僕は富士山を見て此山に關するあらゆる傳説を集めて見たいと思ふ

たそれからの附近にむかしアイヌの住んで居つて今も猶ほ地名にアイヌの言葉が残つて居ることなど古き記憶の底から湧き出て来た。宿に歸つて朝の燈明の晃々たる神棚を見ると其處に奇異なものを祀つてあるのを發見した、それは即ち陽石である。こは古代に於ける生殖器崇拜の遺風で日本人ばかりでなく殆んど世界の各民族を通じて見出されるのである。坪井理學博士の説に依ると各地に發見せられる陽石は原人の使用した石鏃であらうといふことである、富士山、アイヌ、石鏃、生殖器崇拜、陽石、此等結び付けて考へると興味自ら湧いて来る。

### ▲大宮の半日

富士の山麓大宮は今を去十二三年前全國の獵友をして熱狂せしめた富士の卷狩の根據地として、將た又僚友角田浩々君の出身地として僕の記憶に存して居る。僕は富士の卷狩の計畫に參し屢靜岡大宮等に赴いたが其時大宮で獵友連と土地の獵師が富士の大澤で獲たといふ三十貫の大猪を剖いて痛飲したことがあつたがその豪快は今に忘れられない。今度吉原へ來ると大宮はモウ眼の先で鐵馬の一時間で通へるヨシ當時の如き愉快はないにしても猪

は今も猶あるであらうから一つ喰に出掛けて見ようぢやないかと一行の波多君を誘ひ九日の午前十時に吉原より鐵道馬車で大宮へと向うた。此鐵馬は近頃身延電鐵會社で買収し富士驛から甲州身延まで電車を運轉することに成り今年の夏季までには營業を開始する手筈になつて居るさうだ、愈開通したら身延詣でに便利なばかりでなく富士遊覽電車として繁昌するであらう。大宮で下車して先づ淺間神社に參詣をし武田信玄七本櫻の遺株を觀、又東宮殿下御手植の櫻を拜した、境内に三島毅氏の選になつた御手植櫻の碑が建つて居る。境内を立出て先年猪を

喰つたのは此邊りであると清水の流れに水車の掛つた風流な料亭に上り何は兎もあれ女中を呼んで猪の注文をしたこの女中は二三日前駿州清水邊より來たのださうで、土地の事情は知らないといふ僕が「この家にしゝがあるか」と聞くと「家にはありません、向ふに賣つて居ります」「ぢや此處へ取寄せて貰へるだらうな」「聞いて見ませう」「何しろこの土地の名物だから態々喰に來たのだ、成るべく軟かさうな好い肉を……」女中は怪訝さうに僕の面を眺め「へエー」「早く持つて來てお呉れ、さうしてお酒を熱くしてね、しゝといふ奴はビールぢやいけな」と獨り極

めに極めると女中始めてそれと悟り「旦那し、ちやありません。しですよ」「何んだす。だつて、人を馬鹿にして居る、し、はないのか」「お生憎様」「オヤ、く、モウ是で當初の計畫が外れて氣拔の體であつたが同行の波多君「し、のないはお氣の毒でした。がその代りし、の氣焔に當てられるのを御免蒙つたので僕は大きに仕合せでした」果は笑ひとなり熱燭二三本を倒して此家を立出でた出合頭に此町の町長菅沼正作君十二三年前に比べると頭の白髪が大分殖えて居るが見覚えのある面貌「町長さんでしたか暫らく、彼の時はいろいろ御厄介で」と挨拶をする

と菅沼君「これはお珍らしい、アノ時から十二三年になりまして、お蔭で大宮の町も少しは異つて來ました」とそれより町長の案内で淺間神社の附近に新に開かれたる坂道を辿り、富士軌道の社長宮幡氏の別荘を訪うた。この別荘は近年新に建築せられたもので貴顯紳士等の來遊せらるゝ時、宿泊の用に供するさうで自然の岩石(熔岩)で庭を作り瀑も懸り泉水もあり其多く自然を利用してある所に趣がある「年月を経て岩石に苔が蒸すやうになつたら一段の雅趣を呈するでせう」と菅沼君語る。別荘を辭し路々菅沼君と談じて大宮の交通機關の發達を知るを

得た。十二三年前には鐵馬は鈴川より大宮迄しか通じて居なかつたが其後富士軌道會社(資本金十萬圓)の手で大宮より上井出迄軌道を布設して馬車が通うて居る、それを更に延長して甲州境の駒立より本栖湖を廻り甲州吉田へ通すべく既にその一部の工事に着手して居る、愈全部開通の暁には駿甲の往來が非常に便利になり又夏季には本栖湖の避暑客等が多くなるであらう、身延電車と云ひ富士軌道の延長と云ひ從來不便を極めた駿甲間の交通機關の發展するは喜ばしき限りである、誰か一つ富士のどてッ腹を穿き破つて甲州路へ電車を通はする計畫はある

まいかと復りの鐵道馬車の中で話すと乗合の與太郎「トネルを作るに金がウンと要ります、人穴を浚えたら安上りでせう」と一同を笑はせやがった。

### ▲幽靈の足跡、閻魔の首級

交通の開けたる今日、箱根を越えても一向化物に出逢はず毎日平々凡々たる旅行を續けて居るばかり、尤も本務の活動寫眞講演會は到る處大盛況にて此方も一生懸命、ワイシャツが汗のためどろくになるほど熱心に講演をするため元氣も大に引立ち平凡な旅行をも續けられるの

だ單に觀光のためなれば五日もすれば倦んで来る、富士の裾を廻つて原吉原邊はむかしは浮島ヶ原と稱して遠方から見ると島が浮上つて見えて居たとか、むかしは富士川に水禽が多く平家の大将維盛の軍勢が羽ばたき音に驚いて潰走したのであるといふ如き説明を聞いても一向に感興を惹かない。何れにか珍なもの奇なもの考へて居たが十日の午後沼津へ到着すると賣捌蘭契社の主人訪問されたがこれは十四五年来の御馴染、僕はイキなり口を開いて「何にか沼津に珍らしいものはありませんか」「先生珍らしいッてどんなものですか」「左様、先づ化物屋

敷のやうなもので奇々怪々なものを見たいのです」「汽車が通じてから此邊に化物は居なくなりましたよ」と蘭契社の主人笑ひながらしばらく考へて小首を捻り「エ、御註文に叶ふかどうか知りませんが、幽霊の足跡は如何です」「幽霊の足跡、ソレは奇抜ですなえ、三島では蛭子様の草鞋を脱いだ寺を見て來たが此處へ來て幽霊の足跡を聞くとは、それは何處にあるのです」「この沼津の在の揚原の靈山寺といふ寺で此處には彌平兵衛宗清の建てた小松大臣重盛の墓もあります、僕は手を拍つて「いよく面白

いねえ、重盛といふ男は強情我慢な親の清盛とは反對の

性格で其一生を通じて何となう影が薄いやうに見える、  
大方其の幽霊の足跡といふのは重盛がヒエードロドロと  
お好みの燈籠の蔭から現れて衣ずれの音も聞えずにスー  
と消えたのでせう、その時分に残したものに相違ない色  
の蒼い險相な知盛の幽霊は船辨慶で御馴染であるが重盛  
の幽霊はまだ見参したことはない、是非その足跡をと獨  
斷的に極めて仕舞ひ愈旅館を立出て靈山寺を訪はんとす  
る時來客があつて遂に目的を果さず、これが所謂幽霊の  
立消えといふのであらう、十一日の朝東京から來た社員  
中西石羊君等と共に沼津公園千本松原に遊んだ。關西の

舞子に匹敵すべき景色の佳い所である、この松は乗運寺  
の開祖増譽上人の植ゑた所で彼の平家の若君六代御前が  
北條に護送せられこの松原で將に首を斬られんとしたこ  
とは諸君が先刻御承知であらう、ソコで僕は世に多く知  
られない奇談を一つ紹介しよう、それは大永のむかしこ  
の松原の濱續き片濱村東間門の海濱へ天竺から閻魔の首  
が漂着したといふ談であるその首の後に「天竺摩羯提國」  
の文字を刻んであつたので寶相院の祖先が拾うて胴體を  
作つてその首を繼ぎ草庵を結んで安置した、その堂の名  
を摩羯提山閻魔堂と稱へて居つたが、近年その堂を西光



寺内に移して閻魔の首は今も猶ほ現存して居るとのことである、時間の都合で一見し得なかつたのは残念だ。この松原は昔時街道であつたのでいろくの史蹟が遺つて居る、と云へばジャ平作の住家の跡などは遺つて居りませうねと來るだらう、ソコで蘭契社の主人は一つ平作の碑を建てたいと云つて居る、伊勢の阿漕の浦に平治の立派な碑が建つて居るのだからこの千本松原に平作の碑を建てるのも面白い思付きである、沼津では珍談奇話を耳にして好奇心を満足せしめ且つ活動寫真も大盛況であつたので翌十二日一行に別れて東京に歸つた。



▲三島法華寺の御本體

(本文二十三頁惠比須様と草鞋)



▲家内安全ワインの後をお供也。

(本文九頁嗚天下の歴史)

花子嬢の喜び (永久不滅のニコく)

「西有移山師のオンニコく」

妾の父は平素にが癪を潰したやうな如之も怒りつばい性質で一家のものはホドく持て餘し自然商賣も繁昌さぞ何時も秋の淋しいみじめな家庭でありました處がニコく雑誌を見せましたら嬉しや心機一轉とでも申へさか全く生れ代つたやうなニコやかな圓滿の人になり昨日まで淋しかつた家庭は俄に春のやうな楽しい家庭になりました。心の持ちやう一つで嗚呼感謝しますとの禮狀に接したり如何にニコく主義の貴きことよ

まだ見ぬ方ありや!

刊月「ニコく」を!



ニコく雑誌は一部 金拾壹錢  
市内は勿論全國到處の書店にあり、  
會員とす會則付見本郵券要拾貳錢

一年分前金壹圓拂込の方を

發行所

東京京橋區南金六町十五番地(新橋際)

ニコく

俱樂部

電話新橋三二八番 四三二九番  
振替口座東京一四九四八番

心ある人の家  
庭には是非ニ  
コく雑誌を  
備へざるべか  
らず………

▲静岡の名物

二月の十九日の朝静岡の活動寫眞講演會に臨まんとて中西石羊氏と共に新橋を出發したが道中格別面白くもなく其日の午後静岡に着いて大東館に投宿した。座敷に着くが早いか姉さん静岡の名物をみんな持つて来てお呉れ」と大風呂敷を擴げたが女中は流石に氣を利用して染付けの小鉢に名物の小饅頭、わざび羊羹、折詰の阿部川餅を持つて来た、阿倍川餅も折詰となつては野趣を失うて面白くない。座敷で眼に付いたのは床に掛た堅額、故大木喬任伯の揮毫した五言の一絶であつた「無欲以當富、無媚以當貴、不違天地心、不負男兒氣」明治二十二年と記してあるので、即ち憲法發布の年に書いたのだ。故伯の豪宕な氣象が見えて面白い、コ

静岡の名物

んな氣象は段々日本人の頭から消え去つて人間はまるで風船球のやうになりつゝあるのを見ると情なく感ずる。先づこの詩に對しビールの満を引いて胸中の傀儡に注いだ。その夜は講演會に臨み翌二十日は三保の松原に羽衣の遺蹟を訪はんと石羊君と二人で、清水行の輕便に乗らんと駆け付ける。輕便は今し驢馬の嘶くやうな聲を發して出發した所で五十分待たねばならぬ其の間にお城の周圍を一巡した。

### ▲お城の側面觀察

先づ大手の濼際に「教導石」といふ石が立つて居る。これは一名迷兒石と云ひ迷兒のあつた時尋ねる方と報ずる方との仲介としたもので警察の開けない時代にあつては随分役に立つたものである。夫は國會開設の

大詔の發せられた明治十四年の建立だ。其時代に「教導石」が必要であつた所を見ると半面に於て行政警察の不備であつたといふことを證明せられる、然もこの石が静岡縣の警察部や警察署のあるツイ眼の先に立て居るので……僕はコンナ事を考へつゝ來るとはなしにお濼の側面へ出て側面觀察といふことは近頃の流行であるがドラ猫がお妻さんの不在を窺て鯉節を引き出すやうな辛辣な觀察は僕の敢へて試み得る所でない、至つて淡い眼に寫つたもの丈で御免を蒙むる、偕て此處はお城の擲手に當りお濼の水は藍を湛へて物凄く石壁の一角、枯れた大樺の梢から富士が半面を現はして居るのは絶景だ、杉の立木がこんもりとして崖の崩れた所に古ぼけた中折を冠つた休職官吏と覺ほしい男が繪を垂れて寒附を釣つて居る、濃い油を流したやうな水の面に浮子がピク／＼と動いて居る、

### お城の側面觀察

實に靜かな天地だ。その寂寞の境を出てお濠の景色を見て行くと丁度聯隊の後壁に當り水枯れ石現れ小赤壁のやうな面影がある、さうして水に臨んだ所に低い棧敷のやうなものを設けてある僕は手を拍つて「靜岡の人は實に風流だ、この景に對して此設けなかるべからずだ、風流、風流」としきりに悦に入ると石羊君笑を忍で「君、アレハ兵士の洗濯場だよ、見給へ、向の崖から兵士が白いものを抱いて降りて来るだらう、ソレ今棧敷へ下た、洗濯を始めるよ」と兵營生活に經驗ある君の説明、成程と感心すると共に僕の風流心は悉皆破れて仕舞つた、尙ほもお濠に従つて行くと先手に大きな赤煉瓦の高塀が現はれて來た、これは有名な靜岡監獄である、ア、この監獄こそはパスチールの監獄が佛蘭西革命史に特筆さるゝ如くに日本の立憲史に特筆大書すべき價值のある監獄だ。

### ▲名譽ある監獄

監獄の正門には鐵の扉が嚴重に掛つて居る、僕はこれを見て思ひを明治十四五年の昔時に馳せざるを得なかつた、日本の憲法は聖天子の大御心に依て煥發せられた不磨の大典であるが政府をしてこの憲法を發せしむるに至つたのは志士が運動の力である。さうして其志士の多くが幽囚せられたのは此靜岡の監獄だ。土佐の立志社員、徳島の自助社員、偕ては自由黨員など時の政府の忌諱に觸れてこの監獄に打込まれたものが多い。當時志士が民權のために熱涙を注いだ鐵窓は今も猶ほ依然として存して居るのだ、之が民權の盛な國であつたならばこの監獄は繪葉書にでも印刷されて旅客の土産となるであらうに、日本では一つも此に思ひを寄せるも

のがないのは民権の振はぬ證據だと力癩を入れる。「君ソナ所でうるつ  
いて居ると怪まれるせ」と石羊君に云はれてハツと氣が付き直に輕便の  
停車場へと引返した。

### ▲長閑な三保の春

静岡より清水までは僅に一時間、流石に開港地だけに活氣が立つて港内  
には軍艦が黒い煙を吐いて居る、清水から三保へは渡船があるが、僕等  
は二百四十間もある羽衣橋といふを渡つた、この橋から富士を眺むる景  
色は又格別、それに日本晴で頂上に天女が舞ひ降りて來さうな好天氣折  
柄の干潮に漁家の娘が三々五々淺瀬を踏で牡蠣や海苔を探つて居る、そ  
れが一段と畫趣を添へる、三保の松原は遠方から眺むべきもので身その

境に入つては却つて興趣を減ずる、橋の裾で三保神社までの道程を聞く  
と十町あるといふ、道は坦々として砥の如しだ、圃の麥は伸びて雲雀が  
囀つて居る、茅屋の垣根には海苔を乾してある、青い海苔黒い海苔磯の  
香りが袂に染む、向から角兵衛獅子の子供が面白さうに遣つて來る、八  
字髻の洋畫家が未製の水彩畫を提げて歩んで來る、齒を染めた若い丸齒  
が井戸端に歌をうたひながら水を汲んで居る、横垣の内に機杼の聲が聞  
える、梅の散りかゝつた庭に犢が遊んで居る、斯やうなものが僕の眼に  
映じた三保の春である。急ぎ候ほどに早や御穂の神社に着きて候、見渡  
せば春の霞の棚引きて松は緑の色變ぬ宮居の玉垣神々しく何漢と謠曲流  
で行く所であるが何しろ静岡で朝食を喫した丈で飲まず食はずと來て居  
るので腹の蟲が嚙り出し眼も窪み天人五衰の悲みを見るやうな心地がし

て名文も妙句も浮ばない、境内の茶店に腰を下すや否や飯は有かと聞とお生憎様、何處か近所にないかと尋ると茶店の媪さん「料理屋はあります、すが御飯を炊く日と炊ぬ日がありますので、尋ねて参りませうか」とは又た暢氣千萬、成程伯龍以來文明の風の吹かぬ別世界だ。社殿の額を仰ぐと「御穂神社」と大書してその傍に「眷族八千彦命、神主に降りて書す」とあつた、これぞ神様が神主に乗移つて書かしためたる御神筆だ。いよいよ面白くなつて來たわいと神額を仰ぎつゝしきりに感嘆する。

### ▲羽衣傳説の分布

御穂大明神の眷族八千彦命が神主に憑つて文字を書かしたといふと、フン夫は迷信だソナ事は近代の科學が許さないと鼻の先で笑ふだらうが

僕をして云はしむるとこれは別に神變不思議な事でも何んでもない。今日は自動書記で明に説明もせられ又た實驗もせられるのでお望とあれば眼前で御覽に入れる。自動書記の理法を説くのは面倒だが所謂潜在意識の働きとして心理學者はこれを認めて居る。尤も心理學者の認めぬ前に自動書記の實例は諸方にあつたので、この御穂大明神の神額などは其一例だ僕はソナ事を考へながら境内を一巡し石羊君と共に羽衣の松を見るべく海濱へと歩を運んだ。羽衣の傳説は人口に膾炙して居るので、管管しく説明するの必要はないが或る學者はこれを穿鑿してこれは十六世紀頃の佛蘭西人が此海濱へ漂着したのを傳へたので當時の佛蘭西人は恰も天人の羽衣のやうな金紫燦然たる上衣を着け髪を長く垂らして居たがその佛蘭西人が此濱に漂着して上衣を松ヶ枝に掛けて舞踏して居たのを

漁夫が認めたが何しろ白哲人を見るのは初めてなので男女の識別も付かず色が白く髪が垂れて居つたので的切り女だと思つて天女下降説が傳はつたのだと云つて居るが、これは固より附會説で信ずるに足らぬ、羽衣の傳説はこの三保ばかりでなく日本の各所に分布されて居る。本年新春の雑誌新日本に掲げられた坪内博士の創作「墮落」と題する歌曲は丹波真井の天女浴水の傳説を材料としたもので即ち天女が羽衣を竊れて遂に人界に墮落する情景を詠たものである。其他總武線の東葛飾の中山邊に羽衣の松、一名天人腰掛の松といふものがあるさうだ其由來を尋ねると今はむかし東葛飾の或る所に千葉の花を植ゑてあつたが陽春三月百花爛漫たる頃五六の天女がこの花園に降下して羽衣を松ヶ枝に掛けて舞ひ遊んで居つた。其中で容貌の殊に秀でて顔色赫奕たるものがあつたが國主が

これを見てソツトその羽衣を竊んで隠して置いた、魎て天女は花を見て歸らうとすると一人の天女は羽衣のないので天上に歸ることが出来ず、其地に止り國主と夫婦になつて多くの子孫を設けた、これが即ち千葉家の祖先であるといふ。與太公傍より喙を挾んで「道理で先年千葉松兵衛は羽衣といふ煙草を賣り出しましたからね、」

### ▲羽衣の松

この三保の海濱へ天女の天降つたのは安閑天皇の御宇で駿河の東遊といふ舞曲は天女が傳へたと云はれて居る、「東遊びの駿河舞、此時やはじめなるらん」と謠れて居るのは即ち夫れだ。斯やうに候ほどに早や海濱に着きて候、アレなるは羽衣の松にて候、成程枝振がよいねえ、がこんな

羽衣の松

に風が強くては蟬の羽のやうな羽衣は飛んで仕舞ふであらう尤もこの松は昔時の松ではない「駿河國志」と云ふ本に「むかしは吹上濱の先五六町に羽衣松とてありしが度々の津浪に荒れ崩れて」云々とあり又た寛文年間の記行に「それより羽衣の松とて宮より六町ばかり南を指して行く砂深き海邊にて幽かなる祠あり、それさへ破れ果てたり、爰に昔時は松ありしといふ」とある、即ち羽衣の松は既に失なりその跡に小祠が建つて名ばかり存して居たものと思はる、現今の羽衣の松はそれより後に選定せられたものらしく小祠は既に失せて跡形もない。この松も亦た瀧に洗はれ風に曝されて何時かは失なるであらうが羽衣の傳説は永久に滅びない。松の畔に碑が建つて居つたが三間ばかり隔てた砂中に仆れて居る古記録に「松下有碑、享和二年故府尹牧成傑所樹」云々とあるがその碑で

あるか否やは砂中に埋つて居るので分らない。石羊君の鑑定に依ると暴風のために吹仆されたのだといふ、碑の柵も無慘に破壊されて居る、附近にゴロ／＼と轉つて居る石に旅客が姓名を留めたものや、又た海風に曝された棒杭に俳句や歌を遺したものもあるが一向遺し榮えのしないものばかり、此地方は天女の子孫がある譯だから美人が居さうな筈なのに折悪しく美人に出逢はなかつた、責めては頓狂な伯龍殿にでも見参せんと思つたが、一向それらしき漁師も見當らない、偕ては何處かで魚服してゐるのだと魚屋の店を窺いて見るとこれはしたり干物や鹽物ばかりオヤ／＼。

### ▲三保のお料理



僕等のやうに忙しい仕事をして居るものには晝餐をヌキにすることなどは敢へて珍らしいことではないが三保で弱つたのは他に理由がある先づ此朝静岡を出發する際に晝餐は三保と極めたのだが何しろ名に負ふ三保の松原、地名辭書には「滿洲松林」とあるから松の梢から富士が見えて一方には駿河灣を見晴されるやうな眺望佳絶な料亭があるであらう、魚は無論今網から揚つて來た澄洲なもの先づ鯛なれば左様鹽焼でせう、鳥賊と新うどの甘煮も妙でせう、入江で漁たアノ美しい白魚と松原で採つた香の高い松露のお汁はおいしからう、鱈の照焼鮪の丸焼、それも訝でせう、オット待ち給へ、鮪の丸焼は困るツて……と食道樂の目錄を列べたやうなことを云つて樂んで來た、鮮しい鯛や大鳥賊を魚棚に列べてある清水の町を素通りにして、モー少し辛抱し給へ、先へ行つたらキット佳

い所があるよ、海は見えるし松はある、何しろ天女の天降つた三保の松原だからねと石羊君を促して先へくと進んだが偕てドン詰の御穂神社へ到着すると意に満ちたるやうな料亭もなく第一見晴らしといふものがないので石羊君「どうしたのだ、君」眺望絶佳な所が無い筈はない譯だが、首を捻つても及ばず斯くてあるべきにあらねば歸りに一軒の酒屋へ飛び込んで麥酒でヤット元氣を付け赤い顔を春風に吹しながら元來し往還を右へ折れて清水へと渡る。

### ▲船中で龍の講釋

この入江は二十町富士が倒に映るといふ景色の佳い所、船頭は六十格好の面白い爺さん能く話し能く語る。船は帆を掛て鏡の様な水面へと乗出

した。爺さん得々として「西風の吹くに帆を張て西に進むはこれ如何、帆は法なり法を用ゐて自由に操つるなり」と禪宗坊主のやうに自問自答を遣つて居る態で僕等に向て「旦那方は始めてかな、この三保の松原は丁度龍の形をして此處は頭に當つて居る、能く氣を附けて御覽なさい右手に見える辨天の鼻は下顎でがせうそれから左手に現はれて来る眞先の鼻は上顎、貝島は舌に當つて居るでせう、辨天の鼻も眞先の鼻も入海が深いので潮の満干がありませんが貝島の所は入海が浅いので潮の加減で舌の先が出たり引込んだりします、まるで活て居るやうでがすよ、三保の人家の列んだ所はすべて龍の齒に當り松は全體に鱗になつて居ります、偕て肝腎な龍の眼玉でがすがむかしは丁度眼玉に當る所に二つの池がありました。其時此邊の土地が俄に三尺ばかり高くなりまして、池の水が溢れ田地へ流れ込んだ、其時分の人間は野蠻でがすから池に觸ると祟ると云つて其儘に打遣つてあつたので段々と埋つて眼玉がなくなつて仕舞ひました、今の若いものはこんなことを知らないのです私はこの船に乗るお客さんに知らしめてあげますが國への土産になると云つて皆喜ばれます、私は今年六十になりますがお饒舌が大好きで狂歌も遣りますよ、旦那モ一船が着きました」

方伯龍といふ漁師はこんな剽軽な男であつたらう。或は伯龍が假りに船頭に姿を現はして僕等に三保の形勝を語つたのかも知れないよ、何しろ謡曲で有名な土地だから萬事謡曲式で行くのかも知れぬで「霞にまぎれて失せにけり」といふ結末が付かぬと納まらぬからねと語り乍ら清水

の朝陽館へ着いたのが午後の四時頃、早速晝餐をした、め五時頃の輕便で再び静岡へ引返した。

### ▲掛川城の舊蹟

明れば二月二十一日我活動寫眞班の一行は静岡を發して遠州掛川へと向ふ今は昔、永祿十二年今川氏眞が武田勢のため駿州府中(静岡)の館を追ひ捲られて此地へ落ちて來た時には尾羽打枯れた敗軍の將、意氣少しも揚らなかつたであらうがこれは去ぬる一月下旬東京を打立つて東海道を巡回し到る處大歡迎を受け今や全道を風靡せんす勢ある我活動寫眞班東京日々の旗差物を小笠山の朝風に靡かせながら軍容堂々として乗込んだることゝて掛川町は大騒ぎであらうと思ひきや靜かなること林の如く

停車場には一人の配達夫すら迎ひに出て居ない、偕ては野を清めて敵を待つ兵法と覺えたり諸君油断なし給ひそと相誠め停車場通を北へと進む、折柄西尾新聞店の門口より飛び出したる一人の大將、大手を張つて一行を遮つた。誰人なるかと見てあればこれなん此町に出張店を構へたる濱松の西尾新聞店主「拙者只今濱松より到着、お迎ひに參るべきところ配達人悉く出切り甚だ失禮しました」との挨拶、「イヤ夫には及ばぬ、宿さへ極れば」夫れはチャンと取つてあります」とて一行を「八萬九千」といふ料亭兼宿屋へ案内をした、流石に報徳宗の隆盛な土地柄、萬事經濟的、算數的に出來て料理屋の名まで數字を列べてあるのは面白い土地の名を掛川といふのも大方數學の乘法から來て居るのであらうとつぶやくを西尾氏眞面目に「先生夫れは違ひます、掛川といふのはお城の

大手を流れて居る川ですが所々崖が断て缺て居るのでかけ川と云つたのを後には掛川といふ地名になつたのださうで掛川志稿といふ本に載つて居ります、この旅館の後に流れて居る川がそれなのです「これは恐入つた考證該博、吉田博士も舌を捲くでせう」「お暇なら午後から城趾を御案内しませうか之は今公園になつて居るのです」「夫は是非願ひたい、さうしてかけ川の考證をね」と斯て西尾氏の案内にて舊城跡を一巡したるが城跡は小高い丘の上にあつて大手には所謂掛川が流れて居る、水は浅いけれども崖が深い、橋を落したならば兎ても越えられない要害である、西尾氏説明すらく「抑も此城は明應年間駿遠の守護職今川修理大夫氏親の家老朝比奈備中守泰熙が築造したのですが其後徳川氏の手に移り天正十八年に山内一豊此地に封せられました山内氏が高知へ轉封あつた後に

は屢々城主を代へましたが幕末には太田道灌の末裔太田備後守の居城となり御維新の際になつたのです、五萬三千石の小さい大名ですけれども幕府の老中を勤められたので諸大名が江戸へ参勤交代の途次、此の城下を通過する際には行列を留め敬意を表したさうで當時は威勢盛んであつたといふことです」と考證愈々出て愈々詳しい。

### ▲歌人と科擧

僕は大いに喜んで曲輪の跡を一巡したが春は荒墟殘壘に来て藪鶯の囀り椿のほろ／＼と落ちるなど傷心の料となるこの岡は全部粘土から成立つて石といふものゝないのは奇だ、砂上に樓閣を築くといふ譬はあるが粘土の上に城を築いたのである、文永年間有名な連歌師宗長の手記に「こ

の地岩土といふものにて只だ岩に築き上げたりとも云ふべし」とあるは  
夫だ粘土を岩土と云つたのは面白い岩のやうに見えるが實は土なのだ、  
これが宗長の眼にも映じたと見える世間には日本の歌人には科學的知識  
がないと云つて攻撃するものがあるが宗長の如きは既に地質を鑑定する  
の知識があつたればこそその手記に此城の地質がチヤンと記されて居る  
ではないか、螢の研究で有名な渡瀬博士は其論文に於て芭蕉の螢の句は  
能くこの小動物の習性を詠じて科學者の研究と一致して居ると云つて賞  
賛せられた、彼の古今の「鶯の凍れる涙」の句を捉へて歌人は非科學的  
であると云つて攻撃する如きは淺薄極まつたものであるが又た詩歌は想像  
の産物であるから實際と異つても差支ないなどと放言するのも間違ひだ  
と思ふ、詩人が自然を見るの眼と科學者の觀察とが一致して居る所に其

詩の價値があるのではあるまいか、僕は宗長の手記に地質の事を書いて  
あるのを見て非常に面白く感じた、これよりいよ／＼天主臺に登る。

### ▲戦勝観音

天主臺は本丸の山頂に當る所にあつて元和六年松本越中守定綱が三層  
の層樓を建てた跡である今は「戦勝観音」と名づくる觀音の銅像が建つ  
て居る。この銅像は日露戦役陣歿者の冥福を修すべく此地の出身者鈴木  
藤三郎、吉川長三郎及び岡田良平氏の嚴父遠江國報徳社長岡田良一郎  
氏等の發起で東京美術學校竹内一久氏に託して製作せしめ明治四十年三  
月に建立したので天主臺の上に屹立して鐵道の沿線から眺められるので  
ある。從來觀音には如意輪、馬頭、魚籃、千手、偕ては尻喰觀音など隨

分仲間が多いが、明治になつて「戦勝」といふのが一つ殖えた譯だ日露戦役の記念碑は所々にあるが佛像をして代表せしめたのは頗る好い思ひ付きである。日本の如く神社佛閣に於て偶像を拜すべく習はせられたる國民にあつては單純な記念碑や銅像では人々の崇敬を惹くに不充分で、九段に遊んで靖國神社を拜せぬものはないが大村氏の銅像に對して敬意を拂ふものありや否やは疑はしい。又上野の西郷氏の銅像を見給へ、鳥が糞をしつかけたやうに紙たれを投げつけられて居るではないか、外國人などが見たら随分不思議に思ふであらう、東京の例などを引くに及ばぬ、現にこの城跡に建つて居る日清戦役の記念碑の前には參詣者はないが、「戦勝観音」の前には香華が絶えぬのを見ても知れる、即ち日本では紀念碑でも銅像でも或部分までは宗教と結び付けないと國民の崇敬を惹かな

いことが分る、偕て普通の観音の縁日は十七日であるが戦勝観音の縁日は毎月異つて居る、その日付は

- |        |         |       |             |
|--------|---------|-------|-------------|
| 一月一日   | 旅順開城紀念  | 二月九日  | 仁川開戦紀念      |
| 三月十日   | 奉天戦捷紀念  | 三月    | 彼岸中日        |
| 四月三十日  | 鴨綠江戦捷紀念 | 五月廿七日 | 日本海海戦紀念     |
| 六月十五日  | 得利寺     | 七月廿七日 | 大石橋         |
| 八月一日   | 海城      | 九月四日  | 遼陽          |
| 九月     | 彼岸中日    | 十月十五日 | 沙河戦         |
| 十二月十五日 | 地堅起工日   | 十二月二日 | 旅順二百三高地占領紀念 |

即ち何れも日露戦役の紀念日を選んだのであるがその中で三月十日の奉天戦役と九月四日の遼陽戦役、並に春秋の彼岸の中日を大供養日と稱し

戦勝観音

遠州一圓の僧侶を請じて鄭重なる供養を營むことになつて居る、この銅像建立後五年ほどしかならぬが既に「戦勝観音」の御詠歌といふものが作られ鉦の聲が朝霧の中に聞え事務所には御園もチャンと備はつて居り掛茶屋には繪葉書などを賣つて居る、僕はこの観音を拜した時頭に浮んだのは日本も發展するに従ひ年々海外の駐屯兵も多くなるであらうが、其の留守の家族が最愛の子弟の身上を祈るべく信仰の對象となすにはこの戦勝観音の如きものは最も妙である、この観音の體には國家のため異域にて壯烈な最後を遂げた人々の忠魂義魄が寓せられて居るのだから戦争に縁もゆかりもない神佛を念するよりも一層の利益を得べく人々の心の底に強く響くであらうと云ふ考であつた。

### ▲霧噴の井戸

天主臺の傍に「掛川城舊蹟霧噴井戸」と銘打つた古井戸がありその傍に古木の朽た株が残つて居る。宗長の手記に「本城に井あり、前備中守泰熙、當國の事承はりたる始め此山を見立築き遂に水に掘當る、麓の川の底と同じ汲みあぐる轆轤の繩千尺にもあまりぬ」云々とあるもの即ち是此井戸は一名不覗の井とも呼ぶさうで今は柵内にあるので無論覗いて見ることが出来ぬ。この掛川といふ土地は水に不自由な所だから此の城の創造者は籠城の用意にとてコンナ深い井戸を掘つたのださうで霧噴といふ名は敵が攻め寄せて来る時この井戸から濛々と狭霧が立昇つて敵をして眞に五里霧中に彷徨せしむる神秘的な作用のある如き暗示を與へる。

### ▲静かなる掛川町

静岡から掛川へ来ると其町の静かなことが著しく感じられる。町には殆んど活氣といふものがない、道行く人の歩も至つて静かだ、漢學者の理想とする人々禮讓を重んじ道遺たるを拾はずとかいふのはコンナ状態を云ふのではあるまいかと思はれるほど静かである。偕この掛川町に慶安寺といふ寺がある元延壽院と稱して遠州に於ける陰陽道の總別當をして居つた修驗院である。延喜以來公認せられ今川氏の裁許状もあり其領地を院内と稱して遠州に十一箇所を有し其地方に来る田樂、鉢叩、修行法師、狹引の類の支配をして大に羽振を利して居つたのである、僕は日本の宗教を研究するには陰陽道の如きものから調べて行くのが一番の捷徑で

あらゆると思つて居る、秋葉山の三尺坊大權現や豊川の茶者尼天などが何故に多くの信者を集め得られたのであらうか、迷信と云へば夫迄であるが迷信の因つて来る所を調べて見ねばこの疑問を解決することは出来ない、東海道筋は日本でも文化の最も進んだ所であるが迷信も亦た盛んに行はれて居るのを見て驚かざるを得ない、僕等の見る所では今日の多数の日本人は矢張陰陽道などの爲に支配されて居るので眞に宗教の意義を解する人は稀れである、宗教は宇宙の第一義を研めるものであるといふ説は多数の人には一種の謎としか考へられない内務省のお役人が宗教を振興せしむるなどと力んでも駄目なことだ。二十二日の朝歸東すべく掛川驛を發した。車窓顧みれば昨日訪うた城趾には煙雨立籠て戦勝觀音の姿木立の間に朦朧として居る僕は又霧噴の井戸を思出した。



## ▲旭山の黄金探検

二月二十五日の朝再び東京を發して草枕またも結ばん濱松の宿に着いた。西尾新聞店主來り市中の案内せんといふ「何處か面白い所がありますか」と聞くと西尾氏「左様樂器製造會社、製帽會社、日本形染會社などを御覽になつては如何です、濱松へお出でになる新聞社の方は必ず御覽になります」「僕は人の見ないものを見たいのです、何んか人の知らぬ掘出物はありませんか、譬は此邊の山から濱名湖の底まで通じて居るといふ抜穴があつて其處に大百足でも住んで居るといふやうな所は——と仁田の四郎と俵の藤太をチャンポンにしたやうな談、西尾氏煙に捲れて「へエ、昔時はソナナ所があつたかも知れませんが御承知の通りこの地方は

( 92 )

屢々大地震がありましたので、夫に此寒さでは百足などは出ませんよ、が何かお氣に召すやうなものがありませんか……エ、ありますよ」「朝日さす、夕日かゞやく木の下に黄金千杯朱千杯あり』などは如何です」「夫は面白さうですが何の謎です」「此町の東鵬江の觀音の境内に旭山といふのがありますかむかし其地に住んで居た長者が其山に朱を千杯黄金を千杯埋めたといふ口碑が残つて居るのです、只今の歌のやうなものは夫を誑ひ傳へたのです」「僕は覺えず手を拍つて「夫は面白い掘出物ですが其の歌が、一種の識語で僕のみが夫れを解して黄金を埋めた場所と知り掘出すといふ段取りになると一層面白いのですかね、友人の中にも本年の總選舉に打つて出る人もありますので差當り運動費に融通することお出来ますか」と早や千杯の黄金を掘出したやうな氣になる。

## ▲眞淵と熊野

西尾氏打笑ひて「まだ他に面白い所がありますよ國學再興の祖、賀茂の眞淵の舊宅もあります、其から少し遠方ですが天龍寺の東岸池田の宿に長者の跡があつて熊野の墓があります」愈々出て愈々面白い熊野は今東京の帝國劇場で環サンが演つて大評判ですよ」「ぢや、貝塚、土器塚、琉球塚は」如何に僕が古物趣味があるからと云つてさう一時に持込れては聊か面を喰ひます、アハハハハ、ぢや、こうませう、有名な濱松の天主臺を見て夫から鴨江の方へ廻はりませうか」天主臺の見物は矢張月例でせう」先生さう月例とけなしてはいけません徳川勢が三方原の戦に敗けて酒井が太鼓を鳴して武田勢を退けたといふ有名な所なのです」

酒井の太鼓は大に僕の好奇心を刺撃した。ソハ先年歌舞伎座で演じた團洲の酒井が深く僕の頭腦に印されて居るからだ「成程さうでしたね、是非案内を願ひます」と西尾氏と打連れ立ちて先づ町の北なる濱松城の跡を訪ひ天主臺に登つた。この城は徳川氏三百年の基礎を築いた所で歴史上著名なのであるが今は高須某といふ一個人の所有となり某は本丸の跡に居室を構へ天主臺の跡に火見櫓のやうなものを建て、籠城をして居る「知事が來ても誰が來ても俺の許がないと上げないぞ」と主人公なかなかの権幕であるさうな、遺憾なことには酒井の打つた太鼓は今此城になく見附の小學校にあるとのこと。偕て城の濠は埋められ大手の土手は大方取崩され家康の「鎧掛松」といふがむかしを啣ち顔に立つて居るのを見、英雄美人皆黄土、松もむかしの友ならなくにと低回顧望、しばし立

去る氣色なきを西尾氏促して「サア、行きませう、次はお望みの黄金の千杯ですよ」。

### ▲梅屋の庄さん

濱松は舊名引馬と云つたのを家康其名を忌んで今の如く改めたと云ふが西尾、西澤(通信員)兩君は僕のために引馬の役廻りを、勤め鳴江觀音へ行く途すがら利町の公園五社、諏訪兩神社へと案内した、この兩神社は徳川二代將軍の造營に係り日光式の極彩色であつたが、今は金碧大方剝落して居るけれども尙當年莊麗の面影が残つて居る。五社神社には賀茂眞淵翁の手になつた「常塞山」の額又鏡内には同翁の選んだ當社の神主森暉昌氏の碑がある。眞淵翁は人も知る如くに濱松賀茂神社の禰宜岡部定

信の二男で庄助と呼び少時同町の宿屋梅屋甚三郎方の養子となり梅屋の庄さんで通つて居つたがこの時代に翁が教を受けたのは五社の神主森暉昌氏と諏訪の神主杉浦國顯氏の兩人で何れも國學の泰斗荷田春滿翁の門人、分けて國顯氏の妻女は荷田の姪に當り東上する時には杉浦の家に宿泊することもあつたさうで梅屋の若主人、學問好きの庄サンは此碩學の大人に近づくの機會を喜んだ後、妻女の勸告に依り京に上り荷田の門人となつたのは斯やうな因縁からだ斯くて後森暉昌氏は六十八歳で死去したので翁は父を失ふたる如くに嘆き悲しみ明和四年建碑の際七十二歳の高齡を以て其碑銘を選んだのが夫である翁は明和六年七十四歳を以て神去つたのでこの碑文は翁が晩年圓熟した筆になつた名文、但し日本紀の如く古代假名の間に漢文を交へてあるので古文の知識の乏しいものには頗

梅屋の庄さん

る讀み憎い、全文は掲げられないから、歌文を載せる、諸君試みに讀んで見給へ。

騰保門阿不珉烏奈昆氏囉斯豆預例屢之囉哆麼。登寶綫與寧鳴阿吡佐無

### 刀預例屢之囉哆麼

これはなかく讀み憎い、僕は友人阪井久良岐君の知恵を借りこれは日本紀の假名で普通の假名に翻譯すると「とほつおふみなる、ひてらしてよれるしらたま、とほきよになりかゝさんとよれるしらたま」といふ旋頭歌で即ち故人の徳を白玉にたとへて詠じたものであるといふことを知つた。

### 閻魔堂に小豆枕

斯くて諏訪の神社を辭して鴨江の觀音へ詣つたこの寺は文武帝の大寶三年に建立された古い寺で本尊の觀音は旭山から出現した靈像で矢張り掘出物ぢや、其名を引手といふのも嬉しい、僕は大阪に居る頃「三十三箇所靈所參拜競争」といふのを行つて觀音様には馴染が多いので此寺の觀音を拜して一層懐しい心地がした。去りながら僕の眼に付いたのは本堂内にある寛永七年奉納、享保七年再修の力士の額で雙方取組んで居る所を木細工で造つたもの、寛永七年といふと江戸四谷鹽町で明石志賀之助等が始めて勸進相撲を行つた寛永元年を去る僅に七年の後で随分古い珍らしいものだ境内に義太夫語り豊竹國太夫の碑が建つて居る國太夫は森田甚兵衛と呼び濱松の飴屋の主人で淨瑠璃を語り其名を遠、駿、參の三ヶ國に知られ去る明治四十一年歿する時七十人の門人があつたといふ、

七十人の門人といふと孔子様の御弟子と同數だ如何に此人が斯界に主んせられて居たか分る。境内に十王堂あり閻魔大王を始め十王が鹿爪らしい顔をして列んでゐる、堂内に手足の折れた人形や、紅小綿の小さな枕、玩具などが所狭きほど投げ込れてある、僕は之を見て端なく亡兒の事を思ひ出して胸をむしられるやうな心地がした。ア、この小さな枕、此堂へ納めやうと思つて誰が縫たのであらうか、玩具を弄んで居つた子供は今何處へ行つて居るだらうか、僕は兒を失つた親の外は經驗し得ない痛切な思ひに暮れて居るを斯くと知るや知らずや西尾君「どうです黄金の埋つた山を御覽になりますか」「イヤもうよませう、世の中に子にまざる寶はないと云ふがこの可愛らしい、寂びしい、あはれな遺物を見ては黄金などを探す氣になれないので……。

### ▲眞淵翁の舊宅

鴨江の觀音を辭してさんざぶる街道の並松を隔て、遠州灘の見晴しよき丘を下り字志場へ出ると其處に眞淵翁が誕生した茅葺の舊宅がある、こは翁の日記にある「岡部の家」である、先頃まで加茂神社の神官で翁の末系に當る岡部某が住んで居たが今は空屋となり荒果てゝ居る。葛蘿で支へられ古い門を入つて破窓から座敷を窺いて見ると、薄暗い光線が煤ぼけた室を透して幽暗の陰を投げた處に空しい神棚や壊れた祭具の類が地震で揺落されたやうに轉倒して實に慘たる光景を呈して居る、彼の宣長翁の住居たる伊勢松阪の鈴廼屋などに較べると其の荒方が甚だしい。尤も眞淵翁は半生を江戸に送り時々此處に歸省せられたるに反して、宣

長翁は鈴廼家にあつて有名な古事記傳等を著はされ其處で終られたので  
彼は趣を異にして居るとは云へ、あまり荒廢の甚だしいのに驚かざる  
を得ない、が、此家の一木一石は故翁を偲ぶの料とならぬはなく、彼の  
葛蘿の纏つた門は翁が江戸に出でて後二年振りに「此秋は母をもがみ  
妻子はらからにもあはゞや」とて歸省されたる時、母刀自が「まことに  
門に倚りて待受け給ふ」とある其門であらう、又た薄暗い光線の射込み  
たる座敷は翁が再び出立せられんとして「妻子のまとひ来てくれぐ」と  
名残りをしむに身ながら心に任せねば人やりならぬわかれ路こそわりな  
く悲しけれ」と嘆かれた所である。偕は又後の歸省に母刀自の亡き人と  
なれるを追慕して「母は亡せ給ひにけれどまだおはさぬものと覺えぬを  
備へ物の具など白くてあるを見るも云はん術なく涙のみなじみてよ」と

流る、去年の冬参り來ざりし怠りを悔の八千たひ思ふもかなし」と愁  
嘆せられた所であらう。又た彼の破れたる折戸を見ては寶曆十三年の六  
月、故翁が六十七歳の老いの身を扶けて歸省されたる時、詠じたる長歌  
に「年々に偲び奉れば故郷にゐたまふが如く常はしも思ひてしものを、  
何しかもとな歸りて逢人に言問ひぬれば父の實の父はゐまさずはゞそは  
の母もゐまさず、しかはあれど、吾妹なねの頭に白髪おいてかな戸より  
出ると見れば母刀自はゐましにけりと、立はしり入りてし見れば、面  
は皺かきをりてよるぼへる我をしも見て、妹なねは父來ましぬと訝かし  
み思ひたりけり、かたみに言をも問はず、白玉の涙かきをり對ひ居て、  
昔は偲ぶことぞ多き」と詠じたるを思ひ出して斯る美しき親子同胞の眞  
情の今や生存競争の大波に揺られつ此家の荒れ行く如くに荒れつゝある

を悲む。

### ▲日英合資の鐵工所

エマアソンは、銀行、事務所、選舉、製造所等の新しいものでもトロイの都を詠じたる如くに詩の材料とならぬものはないと云つて居る。が日英合資の鐵工所が新しい詩に詠せられる時は恐らくはこの古き翁の舊宅は破壊の運命を免れない。今や灰色せる茅葺の翁の舊宅の前に瑞穂の波を打したる田は埋められて其處に赤色の鐵骨の建物が組立てられて居る。こは即ち日英合資の鐵工所である新しきものは遠慮なく舊物を侵して社會の變遷を示しつつあるが鐵槌が響き汽笛が鳴り鎔鑪の火が紅の舌のやうに低く空を管めさうして幾百の職工の群れが朝暮往來するやうになつ

たならば將して今日の閑靜が保たれるであらうか、郷土の歴史を印せる古い木は切仆され祖先以來住み馴れた茅葺は取拂はれさうして背戸の茶園は平げられて夕靄の裡に響く悠揚たる茶摘歌の聲絶え悲痛なる勞働の苦を歌うたものがそれに代り其處にキラ／＼としたる忙しい現代的の新しい町が造られるであらう。故翁の夢想だもせざりし俱樂部、撞球場、牛馬肉屋、輕便西洋料理屋さては銘酒屋などと一所にバタ臭い、汗臭い、さうして油臭い騒々しい町が出来てあらう。左れども悲むを休めよ、こは人力で抗することの出来ない現代の大勢である、只僕は斯る場合に於て翁の舊宅を保存するの困難なるを感ずるので未だ破壊の手の甚だしく伸びざる今日に於て適當の場所に移して保存したいと思ふのである。

### ▲謡曲式の道行

「是は東京日々新聞の記者なり、さても遠江國池田の町の旅館の娘をば熊野と申し候ひき、近頃都にて環サンの歌劇に依り一人名高くなり候ほどに此春は其墓をば用はばやと思ひ候」、夢の間おしき春なれや、昔時の花を尋ね見ん、是は遠江國濱松の通信社西澤と申す記者にて候、偕る熊野の墓、天龍のほとりにありと聞え候が此度は案内に参り候」旅の衣手吹く風や輕鐵駛る中野町、早や天龍川を打渡り池田の宿に着きにけりと、西澤君と兩人で謡曲式の道行と洒落れ池田の宿に着いたもの、熊野の墓は何處にあるか方角も分らず、水車の音の忙しい精米場へ飛込んで「ゆやは何處ですか」この先の赤い瓦斯燈の出で居る所です」と教

へられたる瓦斯燈を目當に往還に従つて行くと熊野ではなくて洗湯屋であつた、まるで下手な大阪二輪加だ。後で聞くと此土地では熊野などと呼び捨てにするものなく熊野サン熊野御前或は熊野侍従と敬稱をつけぬと通せぬといふことで丁度甲州へ行つて信玄を呼び捨てにする相手にならないと同じ風だ。

### ▲熊野の墓

西澤君は熊野と湯屋との失策で悄氣で居るを僕は勵して「ナニ、君大丈夫だよ、僕が見た案内記にある山崎開齋先生の詩に「湯谷墳殘林藪中」とあるから藪を見當に尋ねて行けばよいさ向ふにこんもりとした森が見える。アレを目標として進むべし」と勢込んで行くと湯屋を去る僅に一



丁ばかりの所に、黒の冠木門があつて其前に「熊野御前の舊跡」と記した札が眼に付く、何んだ此處かとばかり門に入ると本堂の右手、小さな柵の中に一基の小石塔がある、柵前には手拭や繪馬がぶら下つて恰も流行祠のやうな體裁、土地は低くツて濕めツぽいけれども藪の跡であるやうにも見えない、僕は西澤君を顧みて「僕は常々學者の詩文などは兎角文字に囚はれる癖があるので其を唯一の資料としては間違が多い、故老の談などが却つて罪がなくなつて興味が多いと云つて居るのだ」と云ふと西澤君「でも夏になれば此邊に蚊咬位は出ますよ」と輕妙な一言、僕は忽ち頤を解いた。

### ▲愛想よき細君の案内

夫より寺を尋ねると折柄住職は不在で年の若い束髪そくはつの細君、三歳位さいごらの色いろの白い肉にくの肥こえた男おとこの兒こを抱かかへたのが庫裡くりりの方ほうから出て愛想あいさうよく僕等ぼくらを迎むかへ熊野サンの墓はかに案内あんないをした「左右さゆうの御墓おほかは熊野サンとお母サンので真中まんなかのは宗盛むねもりさんなのですが、これは熊野サンが菩提ぼだいのために建てられたのです、熊野サンの御墓おほかへお参りをすると女の腰こしより下したの病やまひが癒なほると申まをしてコンナに手拭てぬぐひや繪馬えまの奉納ほうなうがあります、此寺このてらには熊野サンとお母サンの御位牌おゐはいもあり、熊野サンが法體ほふたいの木像もくぞう、京都きやうとから持つて参まゐられた十じゅう一面觀世音めんくわんぜんなどもムいます、それから熊野サンが都みやこから歸かへられた時とき、宗盛むねもり卿きやうより賜たまはり寵愛ちやうあいせられたといふ座論梅ざろんばいといふのは此處このところに咲さいて居ゐる梅うめで一名八房やちぶの梅うめとも申まをします、當寺たうじは無住むぢゆうで荒あれて居ゐりましたのを七しち年前ななぜんに私共わたくしどもが参まゐつて漸やく此これだけたいたしたのでムいます、宗旨しゆじですか、

藤澤遊行寺の末寺で時宗で△います。

### ▲觀世自筆の謡曲

斯くて兩人は本堂に上ると細君は寶物の箱を携へ來り「當寺には古文書  
なぞもありませんが慶長年間天龍川の洪水で寺が流れました際殆んど流  
失しまして残つて居るのはこれ丈で△います」と其箱を僕等の前に置い  
た、細君が斯く話す間に子供は膝より滑つてチヨコくと佛間へ行き詠  
歌の鉦を鳴らして遊んで居る、僕は恭しく其箱を披いて見ると寺の縁起  
御朱印、熊野の畫像、謡曲熊野の圖等であつたが中にも熊野の圖は應仁  
元年作者觀世が佐渡よりの歸りに態々此寺を訪うて其の舊記を求め熊  
野の謡曲を作り文明八年東山にて始めて熊野の能を催して義政の觀覽に

供し感賞を得たので觀世は自筆で謡の一軸繪入を作り此寺へ寄進したと  
いふ傳があるが現存のものは寫しであるか本物であるか詳しく調べる暇  
がなかつた。位牌には熊野法名珠月院貞玉法女建久九年五月三日終焉、  
母善生院池築比丘尼建久元年四月三日死去とある、又熊野の侍女薺の墓  
は池田より一里長野村字前野にあるといふ、謡曲流行の折柄、志ある人  
はこの墓を弔ひ給へホイ忘れて居つた寺の名は攝取山行興寺と云ふのだ  
寺を辭する時子供の鉦の音がまだ聞えて居つた。

尙二月二十八、九兩日豊橋の活動寫眞講演會に出席その序に豊川裕  
荷に參詣し牛久保に於今川義元や山本勘助の墓を弔ひ斯くて三月一日  
より四日間、名古屋の講演會に臨み熱田神宮等を拜して多少の材料を  
得たがあまり永くなるのでこゝらで止めて置く。(終)

### 觀世自筆の謡曲

269  
512

寫眞は本館の特色ニヨクとして御來車奉待上候  
影ニヨク寫眞はニヨク俱樂部へ相廻し可申候

# 日比谷寫眞館

日比谷公園(有樂町三丁目前)

電話新橋一三三三番

「暑中御伺」

日比谷公園御散歩の御席に御來遊希上候

明治四十五年七月十五日印刷  
明治四十五年七月十五日發行

不許複製

ニヨク旅行奥付  
定價金拾八錢  
郵税金貳錢

著作者 福良虎雄

發行人 松永敏太郎

印刷人 松本魁

印刷所 東京國文社

發行所 東京市京橋區南金六町十五番地

大賣捌 東京堂、東海堂、至誠堂、良明堂、北隆館、上田屋

電話新橋 三二八、三二九  
振替貯金口座東京一四九四八番

明治四十五年七月十五日印刷  
明治四十五年七月十五日發行

世記  
志

ニヨク旅行代付

定價金拾八錢  
郵税金貳錢

著作者 福良虎雄

發行人 松永敏太郎

印刷所 松本魁

發行所 東京堂、東海堂、至誠堂、良明堂、北隆館、上田屋

電話新橋 三二八、三二九  
振替貯金口座東京一四九四八番



大賣捌 東京堂、東海堂、至誠堂、良明堂、北隆館、上田屋

# 「暑中御伺」

日比谷公園御散歩の御序に御來遊希上候

# 日比谷公園(有樂町三帝國ホテル前) 日比谷寫真館

電話新橋一三三三番

ニヨク、寫眞は本館の特色、ニヨクとして御來車奉待上候  
影ニヨク、寫眞はニヨク俱樂部へ相廻し可申候

# 大黒天御分身

ニヨク主義の教祖ニヨク俱樂部に安置し奉るニヨク宗の大神大黒天の御分身をば、  
 今回子の神年に因んで特旨の方々に御頒ち致します、御神體は金屬製(幅四寸)の極細工で見  
 るからに崇高の念を起させます、家庭圓滿商賣繁昌を希はれる方は、是非御一體を床間

好機逸す  
 る勿れ!!!  
 百體に限  
 り賣價提  
 供!!!



に安置なされて、朝夕の祝福を御祈りあれ。數に限がありません、可成至急を要す。

東京新橋 ニヨク俱樂部

振替東京一四九四八番

非常の歡迎に  
 付更に茲に三  
 度百體を提  
 金 密 厨 製  
 幅 四 寸 箱 入 寸 工 製  
 一體費 金 三 圓  
 小包 金 三 十 錢  
 送料 黃銅製  
 特別 甲價 金 十五 圓  
 乙價 金 十二 圓



特20

192

ニコニコ旅行

国立国会図書館

022202-000-0

特20-192

ニコニコ旅行

福良 竹亭(虎雄)/著

M45

ADA-0638

